



# サイエンスコミュニケーションと 図書館

## Science communication and libraries

長神 風二<sup>1</sup>

NAGAMI Fuji<sup>1</sup>

1 東北大学脳科学グローバルCOE (〒980-8575 宮城県仙台市青葉区星陵町2-1 東北大学医学部内)  
E-mail : f-nagami@mail.tains.tohoku.ac.jp

1 Tohoku Neuroscience Global COE (Tohoku University) (2-1 Seiryomachi Aoba-ku Sendai, Miyagi 980-8575)

原稿受理 (2008-06-16)

(情報管理 51(5):321-333)

## 1. はじめに

サイエンスコミュニケーション、という言葉をご存じだろうか？ 科学技術と社会、特にいわゆる一般社会とのコミュニケーションの総称として使われている。近年、国の研究プロジェクトなどの支援を受けて、サイエンスコミュニケーションを推進する人材養成が複数の大学・科学館などで行われるなど、急速な進展を見せている<sup>注1)</sup>。

筆者は、サイエンスコミュニケーションの全国規模での基盤整備を目的に「サイエンスアゴラ」<sup>1)</sup>というイベントを2006年と2007年に開催する<sup>2)</sup>などしてきたが、その過程で、複数の方から、図書館とサイエンスコミュニケーションの関係について<sup>ただ</sup>質されたことがある。図書館は、科学技術に限らないあらゆる学術、文芸などを一般社会に向けて広くコミュニケーションする役割を担っている。目的の相似性から、サイエンスコミュニケーションと図書館の親和性は高いはずだが、必ずしも多くの事例は聞かない。本稿では、筆者が調査した限りの現状をまとめるとともに、今後のあり

方についても考えていきたい。なお、筆者は図書館については、制度・法律その他についてまったくの門外漢であり、特に今後についての考察においては絵空事を語ってしまう可能性もある。だが、絵空事が実現不可能である理由を考えることによって、現状を改革するためのアイデアが生まれてくる可能性がある。ぜひ、忌憚ないご批判をいただきたい。

## 2. サイエンスコミュニケーションにおける図書館

### 2.1 サイエンスコミュニケーションとは一定義と現状

サイエンスコミュニケーションは、科学コミュニケーション、科学技術コミュニケーション、などと言われることも多い。人文科学・社会科学を含んでいることを暗示したい場合や理系の学問が中心であることを明示したい場合など、文脈による使い方の違いはあるが、どの言葉も意味すると

ころに大差はない。本稿では、2003年に文部科学省科学技術政策研究所が「科学コミュニケーション」の定義として用いた「研究者、メディア、一般市民、科学技術理解増進活動担当者、行政当局間等の情報交換と意思の円滑な疎通を図り、共に科学リテラシーを高めていくための活動全般」<sup>3)</sup>を指すものとする。

日本においてサイエンスコミュニケーションが盛んに論じられ、多くの実践例が報道されるようになったのは、2000年以降のことである<sup>注2)</sup>。2005年にスタートした第3期科学技術基本計画<sup>4)</sup>や平成16年版の科学技術白書<sup>5)</sup>において多くの記載がなされ、プロジェクト型の調査研究費が複数スタートするなど政策的なテコ入れがあった。特に2005年は、科学技術振興調整費により北海道大学、早稲田大学、東京大学で科学技術コミュニケーター等養成が始まる<sup>6)</sup>など、“科学技術コミュニケーション元年”と呼ばれることもある<sup>7)</sup>。

これらの動きの背景としては、科学技術関連予算の増大によって説明責任が増したことがまず挙げられるが、「説明」という一方向的な言葉ではなく、「コミュニケーション」という双方向的な用語があてられていることが特徴である。その理由には、科学技術と社会との関係の変容がある。特に1990年代以降の英国を中心に、先端科学技術に対して市民の支持が得られない理由を知識不足に求める「欠如モデル」の限界の露呈と反省から、専門家が市民と双方向に対話するモデルへの変換の必要性が強く指摘されてきた<sup>8)</sup>。

例えば、筆者が日本科学未来館在籍時に企画した「ライブトークScience Edge」というトークイベントシリーズは、参加者を50人程度までに限定し、テーマをめぐって研究者が一人で話すのではなく、ファシリテーターとの対談で進行する、という形式である。ゲストである研究者が話したいことを話すのではなく、テーマは研究に置きながら

も、ファシリテーターが参加者たちの知りたいことをくみ取り、それをめぐって話が進行され、質疑応答の時間も通常の講演会以上に多く取られるように配慮した。また、ゲストも研究プロジェクトのリーダーではなく、博士後期課程の大学院生から博士研究員までが、自らの直近の研究成果をテーマにすることで、できあがった研究成果を「教える」のではなく、現在進行形の研究プロセスを「共有する」場になることを目指していた<sup>9)</sup>。

また、昨今、サイエンスコミュニケーション活動の象徴とも言えるようなイベントとなったのは、サイエンスカフェである。科学者・技術者などが大学・研究所などを離れた街中、特に喫茶店などで、科学技術の話題をめぐって市民と語り合うイベントで、近年、各地で行われるようになってきた<sup>10)</sup>。フランスで行われていたcafe philosophique（哲学カフェ）をモデルに1998年に英国でcafe scientifiqueの名前で始められ、全世界に広まりつつある<sup>11),12)</sup>。日本でサイエンスカフェを主催しているのは、大学・研究機関・科学館などから学会、NPOや企業、個人に至るまで多彩で、そのスタイル・会場・テーマも千差万別だが、参加者との双方向性が強く意識され、研究に関する話題提供をもとに研究者と参加者が同じ目線で対等に対話することを売りにしていることが多い<sup>13)</sup>。冒頭にある程度の時間、研究者が研究について話題提供し、それをもとに、質疑応答やディスカッションに長い時間をとって行う、というスタイルが一般的だ。発祥の地である英国では、プレゼンテーション資料やマイクの利用を、もともと多くの情報を持っている研究者の立場を強化し対等さを妨げるものとして、排除する傾向もある<sup>14)</sup>。筆者自らがファシリテーターを務めたものでは、研究者の話題提供を冒頭に行うスタイルをも廃して、参加者へのインタビューから始め、その問題意識に合わせて研究者が話をする、というモデルを実験し、好評を得るなどし



ている<sup>注3)</sup>。

さらにここ数年の動きとして、サイエンスショップと呼ばれる、市民提案による課題を参加型で研究するプロジェクトが、数か所で試行され始めていることも、最近の特筆すべき動きとして挙げられる<sup>15)</sup>。

このように、サイエンスコミュニケーションは、科学技術において、成果の還元からプロセスの共有へ、普及・啓蒙から対話へと、軸足を移した活動を展開するとともに、市民の側の科学への興味・関心などだけでなく、科学技術の側からの社会についての認識なども問題にする双方向性を特徴としている。

## 2.2 図書館がどのように扱われてきたか

2000年以降の日本において、サイエンスコミュニケーション推進の中心となったのは、主に大学・研究機関、一部の科学館や教員を中心としたグループなどである。市民にとって、最も身近な学術情報入手機関と言える図書館は、この動きに入っていたとは言いがたい。例えば、文部科学省科学技術政策研究所のレポートにおいても、科学技術情報の入手先、として、書籍や雑誌、専門誌というまとめがされるのみで、サイエンスコミュニケーションが行われる場所としての図書館は意識されていない<sup>16)</sup>。筆者が直接に知る、サイエンスコミュニケーションに熱心な大学・研究機関やNPOの担当者とのディスカッションにおいても、連携先として図書館が話題にのぼることは少なかった。その理由について、論拠を持ち合わせているわけではないが、いくつか考えられる点を列記してみたい。理系の大学・研究機関の側から見た外部の連携先としては、①扱っている内容が近く、一定の設備もある科学館・科学系博物館、②教育との連携を打ち出しやすい学校、③市民の中

に出て行ったということがはっきりしやすい街中のカフェ、④貸借がルール化していて借りやすい市民ホール、⑤異分野融合型の新規性の高い企画として報道機関などの耳目を引きやすいアート系の文化施設、などが候補に挙がり、図書館がその特長を認識されるに至らなかったことが考えられる。また、行政区分としても、サイエンスコミュニケーションの新しい動きを主導しているのは、いわゆる旧科学技術庁系の研究機関・研究プロジェクトが主流であり、公共図書館を管轄する旧文部省系の事業と接点が少なかったことも一因かもしれない。

とはいえ、数が多いとは言えないながらも、独自の取り組みを行ってきた図書館や図書館員たちはあり、「3. サイエンスコミュニケーションの場としての図書館」の章で具体的に取り上げていく。サイエンスコミュニケーションと図書館の双方の現場の動きが呼応することで、前者にとっては活動の場が得られ、後者にとっては新たな活用法や利用者層を開拓する流れになりえると筆者は考え、本稿がその流れの促進に役立てばと願っている。

## 2.3 情報学における「科学コミュニケーション」

ところで、図書館あるいは図書館情報学に親しむ方々にとって、「科学コミュニケーション」という言葉そのものはなじみのないものではないかもしれない。情報学の用語であるscientific communicationが、科学コミュニケーション、として訳されているためである<sup>注4)</sup>。

一方で、筆者が2.1で取り上げたような意味でサイエンスコミュニケーションの概念が日本国内で急速に流布したのは2003年以降であり、その状況に対して、「最近科学社会学などで、『科学コミュニケーション』とは、一般人に向けて科学情報を

伝えるという非常に限定的な意味で使われている」<sup>17)</sup>といった指摘もあった。サイエンスコミュニケーションは、前述の通り、一般人に向けての情報提供という一方向的な知識の流れではなく、双方向性に主眼を置いた術語である。科学技術の側が生み出した情報をいかに流通させ共有するか、という情報とそのシステムに焦点を当てた術語がscientific communicationであり、異なる層の間で情報が交わされることでそれぞれに変化が生じる人に焦点をあてたscience communicationとの違いであろうと、筆者は考えている。現在では、scientific communicationに対して、「学術コミュニケーション」という言葉を訳語にあてることが多くなってきている。単なる語彙の問題のようだが、図書館が学術コミュニケーションの機関として存在してきたことに対して、本稿で筆者が示そうとしているのは、サイエンスコミュニケーションの担い手となりえる豊かな可能性である。

### 3. サイエンスコミュニケーションの場としての図書館

本章では、実際に、サイエンスコミュニケーション活動を図書館という場を用いて行われている事例を論じていく。

#### 3.1 サイエンスコミュニケーションのイベントを実施する場としての図書館

特に公共図書館において、成人向けには読書会や著者・学術関係者を招いての講演会、未成年向けにはおはなし会といった名称で、トークイベントが古くから行われてきているのは周知の通りである。これらの活動は、対象となる分野を特定していない結果として、科学技術の話題が中心になることは少数であり、サイエンスコミュニケー

ションのイベントとはあまり認知されていない。一方で、サイエンスコミュニケーションにおいては、イベントの際に、話題を科学技術に特定し、科学技術をイベント名に冠することが、対象者を最初から限定してしまうことにならないか、という反省から、他の領域とのコラボレーションを積極的に進めていこうという機運が一部にある<sup>注5)</sup>。図書館において古くから行われ、既に固定的な客層を持っているイベントに、科学技術の学術・産業側が協力することでサイエンスコミュニケーションを促進していくのは、ある意味理想的なモデルと言える。

例えば、鯖江市文化の館（福井県）で行われている“さばえライブラリーカフェ”は、毎回30人程度を対象に、主に地元の研究者・技術者を講師に、「最先端の調査研究や深い思索を行っている方」から「お話を聞きながら気軽に交流する場」という趣旨で、既に40回近く開催されている<sup>注6)</sup>が、数回に1度の割合で科学技術が話題となる。

また、東京都内を中心に、子ども向けの科学の本の勉強会などを中心に長く活動を続けている科学読物研究会は、科学系の本の著者を招いた例会や、テーマを決めた比較の会などを、杉並中央図書館を主な会場として行っている<sup>18)</sup>。科学読物研究会は既に図書館における科学技術の取り組みの重要性を指摘している<sup>19)</sup>が、これらの会合そのものは、図書館側は会場提供をしているに過ぎないようだ。こうした会場になりえるのも、図書館のポテンシャルであるとも言える。

#### 3.2 サイエンスカフェの会場としての図書館

図書館が、サイエンスカフェの会場として使われることも多くなってきている。

前節で述べた、“さばえライブラリーカフェ”も、話されるのは“文系”のテーマが多いが、一種の



サイエンスカフェと言えるだろう。サイエンスカフェを名乗って、図書館で行われているものとして最大のもは、“東北大学サイエンスカフェ”<sup>20)</sup> だろう。会場となっている“せんだいメディアテーク”（宮城県仙台市）は、単純に図書館というよりも、映像メディアの収蔵・貸し出しやスタジオ、展示スペース利用まで提供する複合的な施設で、オープンスクエアと呼ばれる1階の広い（460平方メートル）スペースで、50～200名程度が参加し、毎月開催されている。主催の東北大学は、施設を運営している仙台市とその教育委員会、地元高校・メディアなどとの協力関係を築き、ワーキンググループを形成して運営にあたっている<sup>21)</sup>。

また、総合研究大学院大学が主催するサイエンスカフェが葉山町立図書館（神奈川県三浦郡葉山町）を使用したり<sup>22)</sup>、茨城県が開催しているサイエンスカフェが県内各所の図書館を利用するなどしている<sup>23)</sup>。

また、図書館員が独自の取り組みとして、サイエンスカフェを始めた例もある。神奈川県立川崎図書館は、2006年11月以来、不定期にサイエンスカフェを開催しているが、きっかけはテレビ報道<sup>注7)</sup>に触れたことだという<sup>注8)</sup>。ほかに、大阪府立中央図書



図1 神奈川県立川崎図書館で行われたサイエンスカフェの様子  
（写真提供：神奈川県立川崎図書館）

館でも、2008年の1月からサイエンスカフェを開催し、既に3回を数えている<sup>24)</sup>。

サイエンスカフェを開きたい、と言う個人・団体から、最も多く挙がる運営上の課題の一つは会場が見つからないという問題だ<sup>25)</sup>。簡単なコミュニケーションスペースを備えていることも多い各地の公共図書館は、営業のことを考慮に入れなければいけない市中の喫茶店などと比べて、開催のための労力が少ない場所と言えるかも知れない。図書館側に、意欲を示して持ち込む個人や団体を

表1 図書館を会場としたサイエンスコミュニケーション活動の実践例

名称	会場	主催	人数	実施頻度・回数
さばえライブラリーカフェ	鯖江市文化の館	鯖江市	30人程度	月1回開催
科学読物研究会 例会・くらべよみの会	杉並中央図書館	科学読物研究会	数十人規模	月1回程度開催
東北大学サイエンスカフェ	せんだいメディアテーク	東北大学	50-200人程度	月1回開催
総研大サイエンスカフェ	葉山町立図書館	総合研究大学院大学	16人	1度開催
サイエンスカフェ	茨城県内の図書館各所	茨城県など	40人	年に7-8回開催(うち、図書館開催は2回程度)
サイエンスカフェ	神奈川県立川崎図書館	神奈川県立川崎図書館	40人	不定期に年に5度程度開催
サイエンスカフェ	大阪府立中央図書館	大阪府立中央図書館	70人	不定期に年に数度開催
展示「エイリアン展」in 千代田図書館	千代田区立千代田図書館	千代田区立千代田図書館	—	日本科学未来館での企画展開催期間に合わせて、2か月間程度同様の企画は、年に1度程度

受け入れる素地があれば、より多くの活動が生まれる可能性があるだろう。

### 3.3 図書館の日常的な活動を通じたサイエンスコミュニケーション活動

サイエンスコミュニケーション活動の場としての図書館、という表現は、何らかのイベントをかしこまって行わないといけないイメージを与えるが、必ずしもそうではなく、日常の資料収集、所蔵、貸し出しとその延長の活動を通じて行えることも多くある。科学技術にまつわる時宜にかなった話題を特設コーナーなどの形で利用者に提示したり、あるいは利用者とのやり取りの中で推薦図書のリストアップなどを進めたりなどといったことは、既に多くの図書館で行われている。

神奈川県立川崎図書館は、京浜工業地帯の中核都市という立地もあり、「科学と産業の情報ライブラリー」を名乗り、「自然科学・工学・産業技術系の図書や雑誌、学・協会誌、会社技報、講演論文集、国内外の工業規格や会社史・団体史などを提供」している<sup>26)</sup>。「ポピュラーサイエンスコーナー」と称した一般向けの科学書をそろえたコーナーを整備するとともに、情報誌『やさしい科学しんぶん』（隔月刊）、「サイエンス・コミュニケーター」を特集のテーマにした<sup>27)</sup>こともある館報『科学EYES』（年2回）の発行なども行っている。また、前述の大阪府立中央図書館がサイエンスカフェを始めたのは、期間限定の資料展示「科学・技術と私たちの未来」<sup>注9)</sup>を開催する際に、科学関係機関の発行物を閲覧資料として収集しようと日本学術会議<sup>注10)</sup>に問い合わせたことがきっかけの一つになった<sup>注11)</sup>。

これらの活動は、その性格から、サイエンスコミュニケーションというよりは、2.3で触れたように、学術コミュニケーション (scientific



図2 千代田区立千代田図書館の企画展示の様子

日本科学未来館（東京都江東区）で開催された「エイリアン展」関連展示が、館内施設「展示ウォール」を用いて行われた。  
(写真提供：日本科学未来館)

communication) と呼ばれる方がふさわしいと思われる節もあるだろう。しかし本稿ではこれらの活動の、情報を整理して提示する、という側面だけでなく、図書館の利用者からの要望を反映して科学技術の情報を抽出して提示する、社会と科学との橋渡しとしての役割に着目したい。利用者とのコミュニケーションを通じて社会にある科学への要望が具現化する場となり、科学技術の専門家集団の側に要望を伝えた上で新たな情報を引き出し、再び利用者の側に提示する、といった機能が図書館においても果たせるはずである。図書館の側からは、科学技術の専門家集団は非常にとっつきにくいものに映るかもしれないが、大阪府立中央図書館の例が示すように、求められた以上のことを自ら提案することもある柔軟な集団に、一部で生まれ変わりつつある。両者がより緊密に連絡を取りうる関係を築くことが、サイエンスコミュニケーションの場として図書館に、より大きな可能性をもたらすだろう。

千代田区立千代田図書館（東京都千代田区）は、2007年以来、日本科学未来館（東京都江東区）が開催する企画展の関連書籍をパネルとともに展示



し、同時にトークイベントやワークショップを図書館側で開催するなどしている<sup>注12)</sup>。分野を越えた連携が双方に利益をもたらす例として注目に値する。

### 3.4 専門図書館などが持つ可能性

財団法人味の素の文化センターが運営する“食の文化ライブラリー”（東京都港区）は、食をテーマにした専門図書館で、多くの蔵書を開架し、一般への貸し出しも行っており、専門のサイエンスライター等の間でも知られた存在である。特徴的なのは、児童・生徒のグループを対象とした「総合学習サポート」を専用の受付窓口を設けて対応していることである。利用者の要望に対応したコミュニケーション活動と言えるだろう。

滋賀県立琵琶湖博物館に付設されている図書室は、「滋賀県や琵琶湖に関するさまざまな資料・児童書・図鑑・辞典・読み物・雑誌・博物館や各種団体のニュースレターなど約9,000冊」を開架閲覧に供するとともに、専門書等を7万5,000点収蔵している<sup>28)</sup>。ここでは、学芸員が日替わりで、図書室脇のスペースに常駐し、利用者からの質問を受け付けている<sup>29)</sup>。科学館・科学系博物館で、展示場内でのトークイベントを行うところは少なくなってきた<sup>注13)</sup>が、付設の図書室をコミュニケーションスペースとして活用し、かつ開館日に毎日行っていることはまれである。

専門図書館は、その専門性ゆえに、利用者が来館している時点で、求めていることと提供できる情報とのマッチングがある程度済んでいる。そのため、利用者に対して、専門家の専門性を活かした形でのコミュニケーションが成立しやすい利点がある。理系の研究機関に図書館や情報室が設置されていることは珍しくない。司書職が配置されている大学図書館などは、手続きさえ踏めば市民

も使えるところは多いものの、セキュリティなどの関係もあって敷居が高くなっている。理系の研究所の図書室などでは、貴重な資料の散逸を防ぐ目的や人件費の制限などがあるものの、昼間から鍵がかかっているところも珍しくない。大学や研究所の社会貢献や成果還元が声高に叫ばれる中、一足飛びに街中にサイエンスカフェを実施しに行くのもよいが、自らの図書館・図書室の公開度を上げる試みもあってもよいのではないだろうか。そのための呼び水として、図書館・図書室を用いたサイエンスカフェの実施などが行われてもいだろう<sup>注14)</sup>。現在、研究機関でサイエンスコミュニケーションを専門に行う人材を雇用する動きが少しずつだが広まってきている。その際、サイエンスコミュニケーションと広報、さらには、産学連携・知的財産などがセットの職になっていることが多い<sup>注15)</sup>。本来はそれぞれ独立に専門性の高い職ではあるが、司書職とのセットは聞いたことがない。もちろん、各々に専門の人材が配されるに越したことはないが、人件費が限られる場合に、ケースとしてあってもよいと考えている。

## 4. 図書館という存在と知の交差点

サイエンスコミュニケーションにおいて、図書館は3.で取り上げた活動の場としての役割のほか、何が果たせるのだろうか。

サイエンスコミュニケーションの課題やあり方をめぐる議論で、しばしば論点に挙げられるのは、科学者・研究者の知の構造が市民側にとってはなじみやすいものではなく、両者の間のマッチングをどのように行うか、という問題だ。これは、図書館および図書館情報学がもともと問題にしてきたことと、非常に類似性があるはずだ。社会にある関心の所在などをアンケートやインタビューなどで調査する手法なども、研究分野として確立し

てきているはずだ。これら蓄積されたノウハウや知識を、サイエンスコミュニケーション活動そのものにも活かしていくことができればと考えている。わが国のサイエンスコミュニケーションは、天文学や生命科学の研究者、科学館関係者、社会科学、特に科学技術社会論などの研究者が中心になって推進されている感があり、図書館関係者や情報学関係者の寄与は大きくは感じられていない。そんな中、筑波大学大学院図書館情報メディア研究科が、サイエンスコミュニケーション教育に乗り出している。これまで培ってきた専門の知見を活かした貢献を果たしてほしいと考えている。

一方で、サイエンスコミュニケーションで最も重要とされる、双方向性の概念は、必ずしも図書館ではクローズアップされてきてはいないように見受けられる<sup>30)</sup>。必ずしも明示的ではないが、サイエンスコミュニケーションが大きなムーブメントになった背景にある中心的な思想には、専門知を生み出すのが必ずしも学術の側とは限らない、という前提があり、知を生み出す過程をどうデザインするか、という大きな課題がある。一方で、図書館においては、既に生みだされた知をどのように流通させ、共有していくか、が中心的な課題のように見受けられ、知を生み出す過程への関与は大きな問題にはされていないように筆者には感じられる。単に、利用者と図書館員とのコミュニケーションといった卑近な話題に落とすことなく、知を求める市民と学術の側との接点として図書館をとらえることはできないだろうか。図書館員は、科学技術については、科学館や大学などにいるその他のサイエンスコミュニケーターとともに、他の何らかの話題については何らかのコミュニケーターの形で、社会全体のナレッジマネジメントを担う人材として再定義できるのではと考えられる。

## 5. 結語

今回の原稿をまとめる最初のきっかけを与えてくれたのは、サイエンスアゴラ2006の折に会場で受けた来場者の方からの、「隆盛しつつあるサイエンスコミュニケーションから図書館が無視されているのでは？」というご質問だった。専門の学部・学科を全国に有している図書館学・図書館情報学に対して、わずかに10程度のプロジェクトが大学で走っているに過ぎないサイエンスコミュニケーションと比べれば、むしろ逆ではないか、という反発も一旦覚えたが、蓄積されているはずの膨大なノウハウをお借りしない手はない、と直ちに思い直した。現状でサイエンスコミュニケーションを中心的に進めている人々の側は、図書館および図書館情報学などに蓄積されている知やノウハウを素直に学ぶとともに、場としての図書館にも、より目を向けていくべきだろう。同時に、図書館およびそこで働く人々に対しては、サイエンスコミュニケーションが目標としている双方向性の実現のために、担うべき、また、担うことのできる役割について再考していただければと考えている。

最後に、本稿で書いてきたことを提案の形でまとめてみる。

- ①現在サイエンスコミュニケーションに携わっている人々、特に、大学・研究所をはじめとした科学技術の側にいる人々は、具体的な活動の場として、図書館を考慮に入れてみよう。
- ②科学技術の研究機関は、その施設として図書室や情報室を持つならば、それを、機関外にもオープンな形で運用することが可能か検討してみよう。
- ③図書館・図書館員は、館内において、特設コーナーなどを設けるにあたって、積極的に科学技

術の話題も取り上げてみよう。

- ④その際に、臆するすることなく、各種の研究機関・研究者などに協力を求めてみよう。
- ⑤図書館・図書館員は、人々が今知りたいこと、科学技術にこれから明らかにしてほしいこと、科学技術に対して自制してほしいこと、などを声として形にし、科学技術を担う側の人に提示できる役割を担えるか検討してみよう。

上記、図書館の実情など、ろくに知らない立場で、また、提案とした②など、自らの過去・現在を通じた所属機関において提案したことすらない立場で、勝手なことを書き散らしたが、新しい議論の発端となれば幸いである。

## 6. 謝辞

原稿をまとめるにあたって、面識のない筆者からの問い合わせに丁寧にご対応いただき、資料や

写真も送って下さった、神奈川県立川崎図書館の大塚敏高さん・大久保弥さんには、心から感謝申し上げます。また、大阪府立中央図書館の藤田さんは、電話での問い合わせに丁寧にご対応いただき、大阪府立大学経済学部図書館の梶原修さんにはメールでの問い合わせに対して豊富な情報と鋭い示唆をいただいた。また、日本科学未来館の羽田野晶子さんにも資料・写真をご提供いただいた。旺盛な取材力で情報網羅しているNPO法人サイエンス・コミュニケーションのサイエンスカフェ・ポータルを情報データベース的に利用させていただいたことも特記しておきたい。最後に、誌面をご提供いただくとともに、資料に関する細かい問い合わせや参照事項についての質問にも丁寧に答えていただいた情報管理編集事務局の皆さんに心から感謝申し上げます、本稿の結びとする。

また、本稿の筆者は、文部科学省グローバルCOEプログラム（脳神経科学を社会へ還流する教育研究拠点）の支援を受けている。

### 本文の注

注1) この状況に対する資料のうち、筆者が入手しているものの中で最も俯瞰的なものは、サイエンスアゴラ2006「科学コミュニケーター養成の多様性と共通性を考える」実施報告書（日本科学未来館, 2006）だが、一般に入手が難しいものである。また、代表的な取り組みからの報告が、日本科学教育学会年会論文集31(2007)のp.143-158に、学会企画課題研究「サイエンス・コミュニケーション活性化のための人材養成の現状と活動展開」の中に6演題の要旨として集中的に掲載されている<sup>31)</sup>。

注2) それ以前にも多くの事例があるが、サイエンスコミュニケーションを名乗っているものは、JT生命誌研究館（大阪府高槻市）の例<sup>32)</sup>などを除き、非常に少ない。

注3) 第48回科学技術週間サイエンスカフェの一環として、日本橋三井タワーアトリウムで、2007年4月21日に行われた「信用しますか？—テレビの中の科学」で、佐倉統氏（東京大学大学院情報学環教授）をゲストに行われた。独立行政法人科学技術振興機構が運用するサイエンスポータルに、開催レポートが掲載されている（<http://scienceportal.jp/contents/guide/report/0704/070421.html>）。

注4) 例えば、この『情報管理』誌においても、2003年に「高度情報社会におけるサイエンス・コミュニケーション」という論文が掲載されている<sup>33)</sup>。また2002年には、「歴史のなかの科学コミュニケーション」<sup>34)</sup>が翻訳出版されている。

- 注5) 例えば、文部科学省科学技術政策研究所による2005年のシンポジウム「サイエンスコミュニケーションの広がりー縫い目のない文化（シームレス・カルチャー）を実現するために」は、そうした問題意識から開催されている<sup>35)</sup>し、木村政司氏（日本大学芸術学部教授）によるサイエンスとアートの協業の必要性を強く主張した文章が2006年末に発表される<sup>36)</sup>などしている。
- 注6) 鯖江市のホームページ（<http://www.city.sabae.fukui.jp/>）から「ライブラリーカフェ」で検索すると、直近のものや、次回開催の情報にアクセスできるが、これまでの活動をアーカイブ化したページなどは見当たらない。
- 注7) 2006年4月の科学技術週間を期して行われた、日本学術会議が主催したサイエンスカフェは日本各地21か所で行われた（<http://www.scj.go.jp/cafe/web-content/>）。大規模な試みだったこともあり、多くのメディアによって取材・報道が行われた<sup>37)</sup>。
- 注8) 神奈川県立川崎図書館情報サービス部産業情報課の大久保弥氏私信による。
- 注9) 平成20年1月5日（土）から20日（日）まで開催。科学技術に対する意識調査の国際比較から、主要新聞の科学関連紙面の紹介、科学雑誌発行点数などのデータ、科学と倫理に関する雑誌記事一覧などの展示が行われた。（当時、大阪府立中央図書館、現大阪府立大学経済学部図書館所属の梶原修氏からの私信による。）
- 注10) 2006年に全国一斉のサイエンスカフェを主催した日本学術会議は、最近、会員の研究者を積極的に各地に派遣してサイエンスカフェを実施する事業に取り組んでいる<sup>38)</sup>。
- 注11) 大阪府立中央図書館への電話での問い合わせによる。
- 注12) 千代田区立千代田図書館のホームページには、日本科学未来館での企画展「エイリアン」展（2008年3月から6月開催）に合わせた展示についての案内などが掲載されている<sup>39)</sup>。
- 注13) 例えば日本科学未来館の「展示の前で研究者に会おう」は2001年の開館以来月に1度のペースで続いているイベントであるし、それ以外にも2005年頃行われた「ライブトークScience Edge」など展示場内を会場としたトークイベントは数多い。また、国立科学博物館では、ディスカバリーポケットという展示場内施設を利用した「ディスカバリートーク」というイベントが、毎週末に行われている。
- 注14) 既に行われている例として、東京大学柏図書館の例が挙げられる<sup>40)</sup>。
- 注15) ちなみに筆者は、広報・コミュニケーション担当であるし、ほぼ同様の担当が、東京大学の理学部と工学部に置かれている。国立遺伝学研究所は知的財産室というセクションが広報も担当する。

## 参考文献

- 1) 独立行政法人科学技術振興機構. “サイエンスアゴラ”. Science Portal. <http://scienceportal.jp/scienceagora/>, (参照2008-06-06).
- 2) 長神風二. サイエンスにおけるより大きなつながりに向けて～サイエンスアゴラ2006 実施総括～. 科学技術コミュニケーション. 2007, no.1, p.14-24.
- 3) 渡辺政隆, 今井寛. 調査資料100 科学技術理解増進と科学コミュニケーションの活性化について. 概要版, 文部科学省科学技術政策研究所, 2003, p.1.
- 4) 内閣府. “第3期科学技術基本計画”. 科学技術政策. <http://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/kihon3.html>, (参照2008-06-06).
- 5) 文部科学省. “平成16年版科学技術白書”. 文部科学省ホームページ. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/](http://www.mext.go.jp/b_menu/)

- hakusho/html/hpaa200401/index.html, (参照2008-06-06).
- 6) 文部科学省. “平成17年度科学技術振興調整費新規採択課題一覧”. 文部科学省ホームページ. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/17/05/05053102/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/05/05053102/001.htm), (参照2008-06-06).
  - 7) 小林傳司. トランス・サイエンスの時代. NTT出版, 2007, p.18.
  - 8) 小林傳司. トランス・サイエンスの時代. NTT出版, 2007, p.48-55.
  - 9) Nagami, Fuji. “Interactive events related to the latest research achievements: Closing the gap between science advancements and the public”. The 9th International Conference on Public Communication of Science and Technology Proceedings. 2006, p.185-188.
  - 10) NPO法人サイエンス・コミュニケーション. “サイエンスカフェ・ポータル”. <http://cafesci-portal.seesaa.net/>, (参照2008-06-06).
  - 11) Dallas, Duncan. Cafe Scientifique-Deja vu. Cell. 2006, 126, 227-229.
  - 12) Cafe Scientifique, <http://www.cafescientifique.org/>, (accessed 2008-06-06).
  - 13) 佐々義子, 真山武志. バイオカフェの効用: 科学者の積極的関与への期待. 化学と生物. 2007, vol.45, no. 10, p.735-737.
  - 14) 北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット. サイエンス・コミュニケーション ワークショップ in Sapporo イギリスと日本の現状と展望. 2006, p.66.
  - 15) 春日匠. 日本におけるサイエンスショップの可能性～市民社会が担う公共性のために～. 科学技術コミュニケーション. 2007, no.1, p.36-46.
  - 16) 渡辺政隆, 今井寛. 調査資料100 科学技術理解増進と科学コミュニケーションの活性化について. 文部科学省科学技術政策研究所, 2003, p.17-21.
  - 17) 倉田敬子. 学術情報流通とオープンアクセス. 勁草書房, 2003, p.6.
  - 18) 科学読物研究会. “科学読物研究会”. 科学読物研究会ホームページ. <http://kagakuyomimono.cool.ne.jp/>, (参照2008-06-06).
  - 19) 市川美代子. すべての子どもに科学のおもしろさを！—科学の魅力を伝える司書のいる図書館—. 図書館雑誌. 2006, vol.100, no.4, p.208-209.
  - 20) 東北大学. “Science cafe”. 東北大学サイエンスカフェ. <http://cafe.tohoku.ac.jp/>, (参照2008-06-06).
  - 21) 福西浩. サイエンスカフェの全国的なとり組み. パリティ. 2007, vol.22, no.3, p.51-53.
  - 22) 総合研究大学院大学. “総合研究大学院大学サイエンスカフェ”. 国立大学法人総合研究大学院大学. [http://www.soken.ac.jp/news\\_all/0228.html](http://www.soken.ac.jp/news_all/0228.html), (参照2008-06-06).
  - 23) 茨城県. “サイエンスカフェのコーナー”. [http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/kikaku/kikakuka/kikaku4\\_kagaku/cafe/cafeindex.htm](http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/kikaku/kikakuka/kikaku4_kagaku/cafe/cafeindex.htm), (参照2008-06-06).
  - 24) 大阪府立図書館. “平成19年度終了分” など. 大阪府立図書館の催し物. <http://www.library.pref.osaka.jp/lib/moyoshi.html>, (参照2008-06-06).
  - 25) 松田健太郎. 日本のサイエンスカフェをみる: サイエンスアゴラ2007でのサイエンスカフェポスター展・ワークショップから. 科学技術コミュニケーション. 2008, no.3, p.3-15.
  - 26) 神奈川県立川崎図書館. “利用案内: 神奈川県立川崎図書館”. <http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/guide/guide.htm>, (参照2008-06-06).
  - 27) 神奈川県立川崎図書館. 特集 サイエンス・コミュニケーター. 科学EYES. 2006, no.48, p.2.

- 28) 滋賀県立琵琶湖博物館. “琵琶湖博物館情報利用室”. [http://www.lbm.go.jp/guide/library\\_m.html](http://www.lbm.go.jp/guide/library_m.html), (参照2008-06-04).
- 29) 滋賀県立琵琶湖博物館. “フロアトーク & 質問コーナー”. <http://www.lbm.go.jp/park/floor/index.html>, (参照2008-06-04).
- 30) 竹内比呂也. デジタルコンテンツの彼方に図書館の姿を求めて. 情報の科学と技術. 2007, vol.57, no.9, p.417-422.
- 31) 日本科学教育学会. 学会企画課題研究「サイエンス・コミュニケーション活性化のための人材養成の現状と活動展開」要旨. 日本科学教育学会年会論文集. 2007, no.31, p.143-158.
- 32) JT生命誌研究館. “3-1. サイエンスコミュニケーション& プロダクション”. <http://www.brh.co.jp/hyougen/science/>, (参照2008-06-06).
- 33) 清貞智会. “高度情報社会におけるサイエンス・コミュニケーション”. 情報管理. 2003, vol.46, no.4, p.213-217.
- 34) ヴィッカリー, B. C. 著. 村主朋英訳. 歴史のなかの科学コミュニケーション. 勁草書房, 2002, 268p.
- 35) 文部科学省. “科学技術コミュニケーション拡大への取り組み”. 科学技術理解増進に関する懇談会資料. [http://211.120.54.153/b\\_menu/shingi/chousa/gijyutu/006/shiryo/05062301/001-3.pdf](http://211.120.54.153/b_menu/shingi/chousa/gijyutu/006/shiryo/05062301/001-3.pdf), (参照2008-06-06).
- 36) 木村政司. “言葉としてのサイエンスが意味するもの”. Science Portal. <http://scienceportal.jp/HotTopics/opinion/06.html>, (参照2008-06-06).
- 37) 日本学術会議 科学と社会委員会科学力増進分科会ほか. 平成18年度科学技術週間サイエンスカフェ実施報告書. 2006.
- 38) 日本学術会議. “サイエンスカフェ”. <http://www.scj.go.jp/ja/event/cafe.html>, (参照2008-06-06).
- 39) 千代田区立千代田図書館. “イベント展示情報”. <http://www.library.chiyoda.tokyo.jp/guidance/aliens.html>, (参照2008-06-06).
- 40) 東京大学柏図書館. “東京大学柏図書館サイエンスカフェ”. <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/kashiwa/chirashi/cafe20080418.pdf>, (参照2008-06-06).

## 著者抄録

サイエンスコミュニケーションの重要性は2000年頃から日本で盛んに叫ばれ始め、関連人材養成のための大型プロジェクトが開始され、多くの取り組みが各地でなされるなど、急速な進展を見せている。図書館は、古くから、人々に学術情報を提供してきた場であり、サイエンスコミュニケーション活動とは無縁ではないが、近年の動きの中で大きな位置を占めてきたとは言い難い。本稿では、これまでに各地の図書館が行ってきたサイエンスコミュニケーション活動を、具体例を取り上げながら概観する。その上で、場としての図書館がサイエンスコミュニケーションにおいて果たしえる役割を議論し、科学技術の側から見た図書館の有用性を論じる。また、人々の科学技術に対する要望や要求を形にして学術の側に伝え、学術の側が伝えたいことを市民に伝える、双方向性をもった場として図書館が機能しえることを論じる。

**キーワード**

サイエンスコミュニケーション, 双方向性, 場所としての図書館, サイエンスカフェ, 学術コミュニケーション

**Author Abstract**

Since the beginning of the 21st century, science communication becomes more popular issues than ever in Japan. Several national educational projects started and many groups (NPOs, research groups, funding agencies, science centres, etc.) or individuals are putting various plans in execution. In this report, several practices on science communication by libraries are described, and the role of libraries as space in science communication is discussed. Libraries could play the key mediate roles in dual directional communication between society and sciences.

**Key words**

science communication, dual directional, library as place, science cafe, scientific communication

